
親友と共に幻想入り

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友と共に幻想入り

【Nコード】

N8063U

【作者名】

柊

【あらすじ】

ある日柊とその親友月冴が幻想入りします

日常書いたりバトルも書いたりできたらいいなあ、と思っています。

おかしな所があってもそこはご勘弁を

注意

東方projectの二次創作に当たるものだと思います

そういった類のものが苦手な人は音速を超えて逃げてください

SkypeID:mannzokusann

プロローグ（前書き）

記念（？）（すべき1話目！

プロローグ

「よし、忘れ物はない・・・よな？」

「行つてきます」

誰もいないが昔からそういつてしまう

鍵もかけたし戸締りokと

「おはよう 柊^{しゅう}」

後ろから男に声をかけられた

柊「ああ おはよう大佐」

こいつは齊藤^{さいとう} 月冴^{つかさ}

昔からの俺の親友で今も一緒に登校してる仲だ
月冴のことを大佐と呼んでいるのは身体能力が高かったりいろいろなことで強いからだ

柊「それにしてもお前は丁度俺が出る時に来るよなー」

月冴「それは お前がいつも定時に出てくるからだよ」

流石親友そこまでわかつてるか

月冴「そうだ 今日は借りてたゲームを持ってきたんだ」

ほら、と言いながら月冴はゲームを渡した

柊「持ってくるなよ まあいいやちょっと待ってる これ置いてくるから」

そう言うと柊は鍵を開けゲームを置いて帰って戻ってきた

柊「今度こそ行くぞ」

月冴「時間大丈夫か？」

柊「お前がゲーム持ってこなければ大丈夫だった」

そう言いながらも怒っている様子ではなかった
そして二人は急ぎ目に登校した

柊と月冴は同じクラスなため登校してからも一緒に行動することが多い

柊「余裕で間に合ったな」

月冴「もうちょっとゆっくりでもよかったかもな」

そういうけど後5分でHRか

柊「早く座ろうぜ」

月冴「そうだな」

二人はそれぞれの席に着いた

HRも終わりと授業に入った

授業をほとんど聞き流して外の風景などを見ていた

生徒たちが画用紙などを持って外に出てきてるところを見ると

美術の授業なのだろう

こういう時にはあのセリフだよな「見ろっ！人がゴミのようだ！」・

・

・・・まあ　口には出さんが

そんな事を考えていると不意に名前を呼ばれた

「深神！^{みかみ}この問題を解いてみる」

声の主は数学の教師のものだった　おそらく俺が話を聞いてなかったから

解けないだろうと思い問題を吹っつけたのだろう

答えられなさそうな奴の困つてるところなんて何が面白いんだろうか？

7

俺は「はい」と返事をして前に出る　それと同時に黒板の前に出る前に

黒板に書かれていることを見て何をするかを理解する

黒板に書かれた問題を解き「できました」と言い席に戻る

「お、おう良くできている」

キンコーンカーンコーン

授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った

やっと終わった　なんて思いながら欠伸をした

・・・そのあとの授業もあまり聞いてなかった

そして5時限目は美術の授業だった

「今日は外に風景画を書きに行くぞー」

という事で外に出ることになった

大半のやつはさっさと描いてサッカーをしたり話しをしたりしている
そんな事でいいのか？なんて思うが先生が「終わったら好きにしてい
いぞー」

と、言ってるしこの状況に何も言わないからいいのだろう

まあ 俺たちもその大半のやつに入るのだが・・・

俺と月冴もさっさと絵を描き終えて山の頂上に近い所にある

巨木の下で寝そべっていた

終「明日、明後日、明々後日とずっと同じような退屈な毎日が繰り返されるんだぜ 大佐」

月冴「…………いきなりどうした」

柊「いやぁ どこかの女子高校生の人みたいに宇宙人、未来人、超能力者がどうのこうの

とまでは行かないけど 少しは面白いことがあってもいいんじゃないかなって事だよ」

月冴「まぁ 面白いことがあったらいいかもしれないな」

柊「そうだろ？ 少しくらいは人生にスパイスがあってもいいよな」

月冴「まぁ 帰りにゆつくりと聞いてやるから今は寝させてくれ」

柊「そうだな 少し寝るか」

なんか揺れてるもう時間か？ まだそんな時間経ってない気がするんだが……

柊「大佐 もうそんな時間か？」

月冴「何寝ぼけてるんだよ早く起きろ！地震だ！」

この揺れは地震だったのか

二人は落ち着いて判断を下そうと動かずにいた だがその行動は間違った判断だった……

柊「やばいすごい揺れだっ！ってうわああ」

月冴「柊！」

月冴は崖から落ちそうになった柊に急いで手を差し伸べたが一緒に落ちてしまう形になってしまった

ああ これ死んだかもな・・・ こんな死に方で終わりか
もうちょっと人生楽しんどけばよかったかな

柊は死を覚悟したかのように目を閉じた・・・

プロローグ（後書き）

なんか・・・バッドエンドっぽい気がする・・・
私だけか？

第一話 幻想入り 話（前書き）

二話目だぜえ

一応二話目の前編的存在

第一話 幻想入り話

•
•
•
•

-
-
-
-
- ?

・生きてる？

マジで！？ 崖と言える場所から落ちた気がするんだが・・・
もう死んだなこれ、とか思っていたのになあ・・・

よつと

おお まさかお前がいるとはな

月冴「お前も起きたか」

大佐がいるとはな

柊「なあ　大佐ここ何処だと思う?」

月冴「向日葵があるし向日葵畑じゃないのか?」

柊「ですよー」

目の前にはそれはすごい量の向日葵

手入れがされているところを見ると誰かの向日葵畑なのだろう

さて俺たちはさっきまで何処にいた? 崖のあたりにいたよな
そしてそこから二人そろって落ちたよな　じゃあなんで・・・

柊「なんで崖から落ちたのになぜ向日葵畑にいるんだあああああ
ああ!!--!!」

月冴「とりあえず落ち着け」

柊「はい　済みません。　で、これからどうする?」

月冴「とりあえず、ここがどこか知りたいな・・・」

???「こんにちわ　ここに何か用かしら?」

二人「!?!」

二人は同時に声のほうへ振り返った

そこには女性がいた緑の髪で顔立ちが整っていると言える

柊「…………ハッ　こんにちわ」

月冴「……………」

???「自己紹介がまだだったわね、私の名前は風見幽香^{かざみ ゆうか}　貴方達の名前は？」

柊「つと　俺の名前は深神　柊です。」

月冴「斉藤　月冴だ。」

二人とも簡単に自己紹介をした

柊「ここに用があつて来たと言う事ではないんですが…………いきなりで済みませんが質問をしてもいいでしょうか？」

幽香「いいけど立ち話もなんだしあちらで話しましょう?。」

幽香が指した先にはテーブルや椅子が並べられていた

移動中に柊が月冴に小声で話しかけた

柊「おい　どうしたさっきから黙って」

月冴「いや 特にどうってことは無いんだがな」 「??」

3人が席に着いた後柊から話を切り出した

柊「幽香さん 信じてもらえないかもしれませんが僕たちは気づいたらここにいたんです。

ここがどこか教えてもらえませんか？」

幽香「・・・貴方達やっぱり外来人ね。ここは幻想郷、おそらく貴方達の元いた所とはちがう世界よ」

なっ「・・・なんだってー」

柊「違う世界・・・ですか」

幽香「貴方達の居た世界は私達には「現代」と呼ばれているわ
そして、

此処「幻想郷」は、貴方達の住んでいる世界とは真逆の・・・

まあ

要するに危険な世界とも言えいいのかしら」

なんか命の危険にさらされてる？

つまりは・・・

柊「ここは幻想郷と言うところで俺らは俺らのいた世界つまり外の
世界からなぜか来てしまった、という事か」

幽香「あら？驚かないの？」

柊「んゝまあ少しは驚いてますよ。でも疑ったりとかじゃなくて
知らなかった何かを発見したような感じですね。

例えば そこにある向日葵 俺は向日葵のことをしらなかった
として貴女に

これはなんですか？ と聞きます。貴方は俺に向日葵について
説明してくれます。

そこで俺は向日葵について知り、こういう植物もあるんだな
と思うでしょう？

でもそこに疑いは無いでしょう？ それと同じです。

まあ 流石に新たに知るものが世界 と言うのは規模が大き
きですね」

．．．．．

柊「．．．話聞いてました？」

幽香「あら？もう終わったの？」

紅茶飲んでるし．．．いいなあ

柊「まあ こうなるとは思ってたけどね．．．」

ん？大佐がまだ黙ってるな．．．ん、なんか悪い予感がするな

月冴はまだ黙ったままだった

柊「さて 大佐そろそろ行こうか？ 幽香さん済みませんがそろそ
ろ行きます。

ありがとうございます。」

何か悪い予感がした柊は早く切り上げようとした

月冴「まあ まて柊 俺も風見さんと話をしようと思う」

さつきから黙っていた月冴が言った

おいおいやつと話したと思ったらなんですかその台詞
あまりいい予感はないぞ

月冴「風見さん そろそろ本性を表したらどうです？」

なつ 大佐やつと話したと思えば 何を言い出すんだ

柊「大佐！何を言い出すんだ失礼じゃないか！済みません幽k」

幽香「ふふ 何故ばれたのかしら？隠していたつもりなだけど？」

えっ まさかの肯定！？

月冴「冗談はよせよ、さつきから攻撃を仕掛けようとしてたじゃないか。

どうせ俺が睨みを利かせなかったら仕掛けていただろ」

柊「えっ そうなの？」

俺だけ置いてけぼりな気がするのはいのせいか？

月冴「お前結構強いんだろ？最初俺らの背後を気付かれずに取った時は驚いたよ。」

確かに注意していなかったとはいえ背後を取ったのはすごいよな
てか 大佐黙ってると思ったらそんな事していたのか マジイケメン
うん大佐はイケメンだよな背も高いし顔も良い
・・・それに比べ俺は背もまあまあな方だし顔もすごく良いという
わけではないし
泣けてくるぜえ・・・

月冴「おい なんで泣いてるんだよ!？」

柊「いや 自分のルックスに対して・・・」

まあ 立ち直ろう うん いつかいい人が現れるってその日を待とう

月冴「まあ あまり悩まない方がいいんじゃない？」

そうしよう・・・ うん

第一話 幻想入り 話（後書き）

読んでくれてありがとうございます

初めの見た人なら解るけどタイトル変更した

第一話 幻想入り 戦（前書き）

前回の投稿から一週間以上経ってしまいましたね

第一話 幻想入り 戦

月冴「さて 質問をしよう 攻撃を仕掛けてこようとしたことに俺は応えてもいいのかな？」

幽香「応えるって 私とやり合おうとでも言うの？」

月冴「そう言っただけだったか？」

月冴の口もとに笑みがこぼれる

幽香「そこまで言うのだから腕には自信があるのよね
がっかりさせないでよ？」

どうしてこうなった……

しかも二人の中ではもう戦う方向なのね……

柊「はあ 大佐ーガンバレーオウエンシテルヨー」

俺は応援に回ろうじゃないか

幽香「あら？貴方はいいの？二人同時に相手をしてもいいのよ？」

二人相手に？何の冗談だそれ？

柊「言っときますけど月冴は強いですよ、舐めて掛からないほうがいいと思いますよ。」

それと俺は月冴がやばい時に参戦しますよ。」

柊は微笑を浮かべる

月冴「さて そろそろ始め様じゃないか。俺はいつでもいいぜ。」

月冴は楽しみでしようがないというような顔だ
そして幽香と距離を取る

幽香「貴方のタイミングで初めてもいいわよ？」

月冴「ほう 余裕だな じゃあお言葉に甘えて俺から行かせてもらおう」

そう言った瞬間月冴は幽香に向って走り出した 月冴は初めに20m程離れてから始めたのだが
その距離を1秒程で10mほどまで縮めていた
それに対して幽香は・・・

幽香「へえ 人間にしてはやるようね」

笑みを浮かべていた 驚きではなく笑みそれは喜びのようにも見えるものだ

月冴は幽香に接近しボディーブローを入れた だがそれは持っていた傘で止められる

月冴は止められた瞬間に距離をとった

月冴「ふむ 止められるとは・・・意外だ」

幽香「それは私もよ？貴方本当に外の人間なの？

本当に面白くなりそうだな」

大佐の本気じゃないとしても止めるのはすごいな幽香さんにとって
も強い人なんじゃ・・・

幽香「さて今度はこちらから仕掛けようかしら これくらいでへた
ばらないでね？」

そう言った瞬間に幽香は月冴に光弾を放った
その数はまさに無数と言ふ言葉が似合うほどの量だった

月冴「ははっ これはすごいな」

月冴は一瞬驚愕の表情を見せたが次には笑っていた

月冴「当たったら痛いそうだな」

月冴はそう言いながらも弾幕に向かって走り出す
月冴は弾幕の中で当たるか当たらないかギリギリでかわしながらも
確実に進んでいた
何とか幽香の前まで一つも当たらずにたどり着く

月冴「今度こそは当てるぜ」

月冴は幽香にもう一度ボディーブロー・・・と、見せかけての
左フック!!

だが、それもまたかわされる

幽香「動きが遅いわよ？」

そう言った時、月冴を傘で吹っ飛ばした

月冴「っがあ」

柊「大佐！大丈夫か！？」

幽香は月冴を軽々と吹っ飛ばした

月冴「ああ 何とかガードして軽減できた」

あの大佐が攻撃を当てられないとはな・・・

柊「俺も参戦する」

柊はそう言った それほど幽香は強いという事だろう

柊と月冴はお互いにしか解らない合図を送った

月冴「よし 行くぞ」

柊「OK」

二人は同時に走り出した 幽香もそれに対し弾幕を展開した
二人ともかすりはしていたものの直撃はしていなかった
まずは月冴が攻撃を仕掛けるだがまたも防がれる
だが、これは予想の範囲内本当の目的は・・・

柊「吹っ飛ばえええええ！！！！！！」

柊の打撃だった 柊は幽香の防御とほぼ同時に打ち込んだ

柊の打撃を受けた幽香は吹っ飛んだ

幽香「くっ 不覚だったわ」

柊「うまく当たったと思ったが・・・」

幽香が吹っ飛ばされたように見えたが実際は後ろに飛ぶことによって直撃を避けていた

月冴が敵わないこともあってか柊は手加減をしないつもりだった

月冴「もう一度仕掛けるぞ」

柊「応」

そう言い二人はもう一度幽香に近づく

今度は柊が先に仕掛ける またそれも交わされと思っていた

そしてかわされた瞬間に月冴が攻撃に移るそうしようとしていた

だが かし

幽香「二度も同じ手は通用しないわよ」

かわさなかった ガードでもなかった

幽香は近づいてきた柊に向かって傘を振る

柊「つつつつ」

柊に当たる

かわすと思ったんだがな攻撃が遅かったか

痛ってえ ガードしたのになあ なんつつ怪力だよ

月冴「うまくいかなかったな 次はどうする」

柊「腕が痛いんだがお前は痛くないのか」

月冴「そのくらい我慢しろ」

そのくらいって俺はめっちゃくちゃ痛いんだが 大佐の腕は筋肉で守られてるのか？

幽香「敵の前で作戦会議？私は待たないわよ」

そう言った幽香は柊に向かって光弾を放った

柊は容易くかわした だが気づいた時には幽香が目の前にいた

柊「つつ」

始めに柊を吹っ飛ばす

月冴「くっ」

そしてすぐに月冴もやられる

二人とも同じ所に吹っ飛ばされた

柊「なんて速さだ」

二人とも立ち上がった その時幽香を見てみると

なんですかその顔はその顔を例えるなら

S っ 気のある人が何かをいじめるような・・・
やばい死亡フラグ臭が・・・

マスタースパーク

その時二人は光に飲み込まれた

柊「大佐 大・丈・夫・か」

月冨「大丈夫・・・とは 言え・・・ないな・・・」

くっ 如何するべきか 流石にこの状況では戦えないよな・・・
仕方ないか・・・

柊「幽香さん今回は逃げさせてもらいます。 また今度会った時に手
合せしてください。」

では また会いましょう」

そう告げ気づいた時には二人はもういなかった

幽香「逃げられたの・・・かしら？」

第一話 幻想入り 戦（後書き）

バトル面書くのは苦手だということに気づかされました
徐々に慣れていこうと思います

後、バトルも書くのでそこはご了承ください

第2話 逃走と闘争（前書き）

言い訳ですが 夏のうちは投稿できてもすごい遅いかもしれません
夏は忙しそうなもので・・・

第2話 逃走と闘争

柊「はぁ・・・はぁ・・・」

二人は向日葵畑の近くの森に入り木の陰で休んでいた

月冴「おい 大丈夫か？」

柊「ああ 大丈夫・・・だ」

二人とも疲労していたが柊は特に疲労していた

柊「はぁ だいぶ落ち着いてきた」

月冴「まあ 無理だけはするなよ」

柊「ああ 解ってるって 心配しなくても大丈夫だって」

月冴「そうか じゃあ、これからどうする？」

柊「人のいるところに行きたいな・・・人里だっけ？ そこを目指そう
治療しないとまずいからな」

二人は先の幽香との戦闘を逃げてきてこの森に来たのだが 二人とも満身創痍であった
だが治療したくても治療するための道具が無いのだ

柊「それよりも最後のあの極太レーザーはなんだ！？
あれくらって生きてるのも不思議だがな」

月冴「死なない程度に手加減した、という事か？」

柊「うーむ 幻想郷よくワカラン」

月冴「よし そろそろ行くか」

月冴は立ち上がりそう言った

柊「行くか・・・って 人里の方向がわかんねえ」

月冴「お前はどこに向かって歩けばいいと思う？」

柊は指をさし

柊「ふむ あっちとか？」

月冴「じゃあ そっち行こう」

柊「えっ・・・ マジで！？ 俺適当に言っただよ！？」

月冴「お前の直感は恐ろしいからな」

ある日のこと

月冴の家に遊びに行った時　テレビには競馬の馬が映っていて
馬の紹介などをしていた

月冴「なあ　柊どの馬が一着だと思う？」

柊「ん　９番」

月冴「なんで？　人気低いぞ」

柊「なんとなく」

その後結果は６番が一着だった・・・
この位柊の勘は当たるのだ

二人が歩きだしてから２０分程経った　二人とも疲労していたのも
あり歩いている最中は無言だった

バツ！

月冴は柊の前に手を出しいきなり止まった

柊「ん 如何した」

月冴は指をさした 柊は月冴が指を指した方に目を向けた
そこには蜥蜴の妖怪が立っていた

二足で立っていて全長2m程あるようだ

なんだアイツは蜥蜴とかげの化け物か？避けて通れば大丈夫か？

！？ あれは子供じゃないか！

妖怪の目の前には子供がいて襲われているようだ・・・

くそっ！どうする？俺と大佐二人で掛かっても今の状況じゃ守りながら切り抜けるかどうか・・・
だけど・・・

そう考えている時にはもう体が動いてた

助ける一択だろうがああああッ！！

柊「うおらああああッ！！」

柊は飛び出し妖怪に攻撃を仕掛けた
不意打ちを喰らった妖怪は少しだけ飛んだ

柊「大丈夫かい？君は人里に住んでるのかい？」

少年はうなずいた

柊「じゃあこのまま人里に行つてできれば人を呼んできてくれないかい？」

まあ できれば早めにしてほしいかな」

少年に心配をかけないように柊はできるだけ笑みを浮かべそう言つた

少年は何度もうなずくとうまく動かない足で走って行つた

柊「すまん大佐手伝ってくれ」

月冴「あの少年が襲われてるのを見てからこうなると予想できてるよ
それにこういうのはもう慣れたよ」

柊「サンキュウー それでこそ親友だ

さーて大將が起きてきたぞ」

妖怪は起き上がった 妖怪は完全に柊を敵と見なしたようで今にも襲い掛かる勢いだ

柊の攻撃を受けたもののほとんどダメージがないようだった
それに対し二人とも満身創痍の状態だった

月冴「さて、この場を何とか乗り切ってあの少年を追うか」

さて飛び出したまでとはいいけどこっちは怪我人二人それに対してノ
ーダメージの化け物・・・

どうする もう一度使うか？ いや、やめた方がいいか 今度は確
実に死ねるレベルだ

考えている時にはもう妖怪が動き出した

妖怪はそれほど速い動きではなかった 妖怪は手を振り上げそれを
柊に向かって振り下ろした

柊は何とかギリギリでかわしたが本当にギリギリだった・・・

くっ 体がうまく反応しない 本当にこれはまずいな

月冴「柊 大丈夫か？ よし 行くぞ」

柊「おう」

始めに月冴が飛び出し攻撃を仕掛けた

月冴のストレートは妖怪に直撃した　だが妖怪は何もなかったのよ
うに立っている

妖怪は月冴に向け腕を振り回した　ただそれだけだったのだが月冴
はもろに喰らってしまった

月冴「ぐあああッ」

柊「大佐　立てるか！？とりあえず距離を置くぞ！」

柊は大佐の近くに行きそうという手を貸した

やっぱり　大佐もダメージが酷いのか・・・
・・・仕方がない　死ぬ気覚悟で使っしかない・・・

柊「大佐・・・　仕方がない逃げよう　悪いが背負ってくれ」

月冴「・・・・・・わかった」

柊「よし　いくぞ」

そう言うとき月冴は柊を背負い　ゆっくりだが走って逃げ出した

二人は少年が走った方向に向かい　妖怪を撒いて休んでいた
二人とも疲労していた　柊に至っては呼吸が乱れ、汗もひどかった

柊「はあ・・・はあ・・・くっ はあ」

月冴「おい大丈夫かよ・・・」

柊「大丈夫・・・夫 とは・・・言えな・・・い」

月冴「とりあえず 追ってきてはいなさそうだな
お前が回復したらすぐに人里に向かおう」

くそっ ここまで疲れるとは そういやあの子は無事たどり着けたかな

柊「大佐 もう大分大丈夫だそろそろ行こう」

月冴「・・・まあ 大丈夫か 立ち上げれるか？」

そう言い柊に手を差し伸べた

柊「ああ ありがとう つ大佐あ 後ろ！」

月冴「！？ があっ」

柊は月冴の手を取ろうとしたが
月冴の後ろにはあの妖怪がいた だが気づいた時には遅かった

柊「があっ」

追ってきたのか？それともに二体目か？ だめだ 意識が朦朧とする
はあ 幽香さんと戦ったりしなければ良かったかもしれないな
今更後悔しても遅いか・・・ もうだめだ・・・

柊の意識は闇の中に落ちていった・
・
・

第2話 逃走と闘争（後書き）

1話1話の長さはこのくらいでいいのでしょうか？
とりあえずこのくらいで行こうかな？

第三話 見慣れぬ天井（前書き）

やはり遅くなりましたね

ゆっくり待っててもらえればうれしいです

第三話 見慣れぬ天井

ん？ここはどこだ？
布団の中だという事は解った

柊は布団の中に入っていて目の前には見慣れぬ天井があつた

本当にここはどこだ？てかここに来る前は何してたんだっけ？

ガバツ！

柊「俺たちは妖怪に襲われたんだっただ・・・」

俺生きてる・・・よな？俺は助かった、という事でいいのか見たところ怪我は治療済みのようだな 大佐もいるな

柊の隣では月冴が寝ていた

大佐も……見たところ大丈夫そうだな
誰かが助けてくれたという事でいいのかな？

襖の開く音がした

??「おお 目が覚めたのか」

そこには女性が立っていた

髪は長く淡い蒼で凜とした雰囲気を持っていた

??「ああ そんな警戒しなくてもいいんだぞ」

警戒するなど言われても大佐はまだ目が覚めてないから

何かあった時には俺が何とかしないとイケないから

それは無理があるな

柊は心の中で呟いた

自分に言い聞かせるように……

柊は最初にその女性を見たときに警戒なんて言葉は出てこなかった・

・

それは第一印象がとても良かったせいもあった

やばかった大佐を見なかったら完全に警戒していた……

柊「いくつか質問してもいいですか？」

??「ああ いいぞ その前に名前を教えてくださいませんか？」

私の名前は上白沢 かみしらさわ 慧音 けいね だ

君の名前を教えてくださいませんか？」

正直柊は迷ったが

柊「……深神 柊」

名前を教えたものの警戒は解けてはいない

柊「では慧音さん質問させていただきますまずここはどこですか？」

慧音「ここは私の家だ」

ふむ 慧音さんの家と言う事はやっぱり慧音さんが治療したのかな

柊が考えをしてると慧音から話を振られた

慧音「深神殿 私の生徒を助けてくれて感謝する
本当にありがとう」

柊「なっ えっ？」

柊は驚愕を隠せなかった・・・ それもそのはず
慧音がいきなり柊に礼をし深々と頭を下げている
今 そんな状況だ

えっ？ なんで礼を言われている？どうしたらいいんだ？

柊は正直どうしたらいいかわからなかった

柊「えっと、あの！とりあえず顔を上げてください」

柊は慧音に顔を上げることが勧めた

もう警戒なんて無かった・・・

柊「なんで俺なんかに礼を？ むしろ慧音さんは俺たちの治療をし

てくれたのでは？」

慧音「さっき言った通り深神殿達は私の生徒を助けてくれたのだよ」

柊「生徒・・・ですか・・・あつ　森で会った少年か!？」

慧音「ああ　私の生徒が森に遊びに行ってしまったて

その時に妖怪に出会ってしまった所を深神殿が助けてくれたと聞いたよ

本当にありがとう」

慧音がまた頭を下げそうになったのを柊は見てそれを止め
今度柊が礼を言った

柊「いや　こちらこそ礼を言わせてください　俺たちの治療をして
くれたのって

恐らく慧音さんでしょう　ありがとうございます」

今度は柊が頭を下げた

二人とも頭を下げ合ったりしてこの状況がずっと続きそうなので
柊から話を振った

柊「俺達を助けてくれたのって慧音さんなんですか？」

柊は確認の意味も込めてもう一度聞く

慧音「ああ　そうだ　今はいないがもう一人助けてくれた人がいるぞ
そのうち会っだろう」

他にも助けてくれた人がいたのか　その人にも礼を言わないとな

慧音「そういえば深神殿はなぜ森に？それよりも二人ともボロボロだったのが気になるが・・・」

柊「ああ　それはこいつが起きてからでいいですか？

まだ質問したいこともありますし」

月冴を指さしてそう言った

慧音「そうだな　じゃあ起きてからにしよう」

そついや大佐が起きないが大丈夫なのか？

・・・トイレに行きたくなってきたな

柊「済みません　手洗い借りてもいいですか？」

慧音「ああ　いいぞ」

柊は立ち上がる　・・・が　しかし

ずっと寝てせいもあるのか体がうまく動かなく
足をもつらせてしまい転んでしまった

慧音「・・・」

柊「・・・」

・・・それだけならいいのだが

柊は転んでしまい結果慧音を押し倒す形になってしまった・・・

柊「……………あつ　すつ　済みません」

何とかそれを言ったがなかなか体が動かない
突然のことで思考が停止している状態に限りなく近い
その時月冴に動きがあつた

月冴「ん、ふああゝ　んん？」

ここで月冴の目線で考えてみよう　目の前には柊と綺麗と言える女性
そしてその女性を押し倒す柊……………確信犯……………

月冴「俺は何も見えてない　親友が女性を押し倒しているところなど見
てない、つと」

布団をかぶり現実から逃避するように

柊「大佐あああああ　誤解だああああああ！！」

柊の叫びは幻想郷の朝に響いた

第三話 見慣れぬ天井（後書き）

次は8月終わる前に出そうと思います

あの作者は投稿が遅すぎる！ とか思いながらも見てください

第四話 方針（前書き）

題名決めるのに困った・・・

今思えば題名の数字は漢数字じゃないほうがいいのかな？

第四話 方針

柊「大佐誤解だからな なっ？」

月冴「はいはい解ったから」

月冴がもう一度寝ようとしてから30分程後

月冴の誤解を柊が30分懸けて解いた

月冴は元々物分りのいい人なので誤解を解くのに
それほど時間は必要ではなかった………と思う

柊「俺がそんな変な気起こすと思うか？」

月冴「さっきの状況はそれにしか見えなかったぞ

ああ お前がそういう気ではなかったことは解ったからな」

本当にわかったのか？

慧音「誤解も解けたことだし朝食にしよう」

そういえば腹が減っていたな

まあ ずっと寝ていたようだしな当然か

そこまで世話になってもいいのだろうか……

案内され向かった部屋には朝食が用意されていた
白米、味噌汁、焼き魚、漬物どれもおいしそうだった

慧音「座りなさい」

立ち呆けていた柊たちに座るよう促す

柊「あつ はい」

柊たちもそれに応え座る

慧音「召し上がってくれ」

柊と月冴は本当にいいだろうか、と思ったが食欲には勝てなく箸を取る

二人「いただきます」

慧音「召し上がれ」

柊は最初に味噌汁に手を付ける

う、うまい 野菜の出汁も出てるし味の濃さも丁度いい

慧音「口に合うといいのだが」

柊「おいしいですよ 本当に」

慧音「それはよかった」

慧音は嬉しそうにそう言う

柊「まるで味の宝石ば・・・」

月冴「古い」

柊が言葉を言い終わる前に月冴が突っ込む

柊「うん 古かったね・・・」

分かる人いるのだろうか・・・

青年食事中・・・・・・・・

二人「ご馳走様でした」

慧音「お粗末さまでした」

どれもおいしく完食し 二人とも満足していた
食事が終わってお茶を飲み落ち着いた頃

慧音「差支えがなければ二人に聞きたいのだが・・・」

二人はなぜあの森でボロボロになっていたのだ？」

二人はお互いに顔を見合わせた後

柊「じゃあ 俺から説明しますよ」

柊は幻想入りしてから最初に幽香に会った事

そして幽香と戦いあの森へ行きあの場面に遭遇したことを詳しく説明した

慧音「あのフワーマスターに勝負を仕掛けたのか・・・

よく逃げてこられたな・・・」

慧音は驚愕に目を見開いていた

柊「えっ よくって・・・なにかまずかったんですか？」

慧音「いや 結構な有力者だからよく逃げられたな、と思ってな」

確かに強かったな・・・

あつ、そういえば

柊「慧音さんこの世界の人間は皆光の弾を放つことができるんですか？」

月冴「それは俺も気になったな」

月冴も気になっていたようだった

慧音「ああ それは皆ができるという事ではないが

そういう事のできる人もいる 私もその中に入るぞ」

柊「へえ 慧音さんも」

慧音「そうだそのうち機会があったらスペルカードについても教えよう」

スペルカードまた知らないものが出てきたな
ふう 幻想郷まだよくわからないな・・・
もっと詳しく知りたいな

慧音「それで深神殿達はこれからどうするのだ？」

柊「どうするって・・・何を？」

慧音「何時^{いつ}幻想郷を出るか、などということだ」

柊「・・・考えてもいなかった」

柊は慧音に言われてやっと気付いたこれからどうするか
何時幻想郷を出るか・・・

月冴から声が掛かった

月冴「そのことなんだが・・・」

どうも歯切れが悪い

柊「どうした月冴？言ってみろよ」

月冴が重々しく口を開く

月冴「俺は・・・俺は幻想郷居に居たいと思っている」

柊「いいんじゃないの？」

月冴「…………ハア??」

つかさは素っ頓狂すったんきやうな声を上げた

月冴「そんな軽く……良いのかよ？」

柊「軽いつて……じゃあ月冴は俺が駄目だって言ったら諦めて帰るか？」

月冴「……………」

月冴は黙る

柊「それにな月冴……俺も幻想郷に居たいと思ってるんだよ」

月冴は予想外の言葉に驚きを隠せていない

柊「だから俺は賛成だし俺も居ようと思うよ」

月冴「……そうか　ありがとう」

??「慧音、慧音ーいるかー？」

今後の方針が決まった、と言うところで慧音を呼ぶ声がした

慧音「ん　ちょっと行ってくるな　待っていてくれ」

慧音はどこかに行ってしまう二人が取り残されてしまった

第四話 方針（後書き）

投稿スピードが初めに比べ落ちている・・・

何とかしなければ！！

第五話 能力（前書き）

眠い・・・ZZZ

第五話 能力

慧音が部屋から出て行って少しした後話し声が聞こえた

??「慧音！昨日の二人いるか？」

慧音「ああいるぞ それよりも落ち着け」

??「合わせてくれないか」

慧音「ああ いいぞ 居間にいるぞ」

そしてこちら側に近づいてきた そして、襖があいた
そこには女性が立っていた 声からも予想はできていた
その女性は手に持っている新聞らしきものと柎たちの顔を
交互に何度も見てうなずいたりしていた

慧音「妹紅、いきなりどうしたんだ？」

慧音が顔を出した

妹紅「慧音これを見てくれ」

そう言い妹紅と呼ばれた女性は慧音に新聞を押し付けるように渡した
慧音は渡された新聞を読んだ

慧音「・・・・・・・・・・ふむ」

柊「慧音さんそれ見せてもらってもいいですか？」

柊は慧音が読み終わったのを見計らって声をかけた
慧音は手に持っていた新聞を柊に渡した

柊「文々。新聞・・・か 何々 ふむ・・・ふむふむ
おお これは・・・」

そこに書かれていたものは前日幻想入りした時の俺らについてだった
幻想入りしてからの幽香との戦いな始まりから終わりまでだった

柊「はい 月冴」

月冴「ああ」

月冴は俺から新聞を受け取ると黙って読み始めた

月冴「おおおお」

柊「どうしたんだよ月冴 慧音さんまでびっくりしてるぞ」

いつも無い月冴でなんか新鮮だな

月冴「いや こんなにも詳しく書いてるし 何時見られていたのか
驚きだよ」

確かに何時見られていたんだ？俺が見ていた時には
俺と大佐と幽香さんしかいなかった気がするが

慧音「それよりも気になることがあるのだが・・・」

月冴「どうしたんだ？」

慧音「その最後斉藤殿たちが逃げる時に風見幽香がピタリと止まったとその新聞に書いてあるのだが それはどどういう事なんだ？」

ああ そのことか どうしたらいいんだろうか

柊は月冴に顔を向ける 月冴も同じように柊のほうを見ていた

月冴「まあ いいだろう」

月冴がそう言った

柊「それについては俺が説明した方がいいか？」

月冴「まあ そうだろうな」

柊「ええっと じゃあまず 信じてもらえるかは解りませんが
俺達は不思議な力を持っています」

こんなこと言って信じてもらえるかな？

慧音「いや 私たちは信じるよ なあ？妹紅」

妹紅「ああ そうだな」

柊「ありがとうございます 簡単に言うと俺は対象の時間を止められます」

やって見せたほうがいいかもしれませんね」

そう言い慧音と妹紅の前に立った

柊「じゃあ 二人とも俺を見てください動いても目を離さないようにしてください」

柊は少し右に動いたそれに応じて慧音と妹紅は目で柊を追う

柊が止まると慧音たち止まる その後柊が動いた時には二人は動かなかった

そして柊が二人の背後に回った時

二人「「えっ!?!」」

柊「こつち・・・ですよ」

二人は瞬時に振り向く その顔はとても不思議なものを見るような顔だった

柊「今途中で力を使いました 多分俺が瞬間的に移動したように見えただけではないでしょうか」

実際はゆっくり動いてましたけど」

柊はまた慧音たちの前に行き座る

柊「まあ 今みたいな方法で幽香さんから逃げたわけですよ」

妹紅「すごいな あのメイド長みたいだな」

柊「メイド長?それはわかりませんが・・・ でも これにはいく

つか欠点があるんですよね」

慧音「欠点？」

柊「まず とても疲れることですね これ2、3分使うだけで疲れてしまうんですよ

そして 二つ目は詳しく言う時間と時間を止めると言う事ではないんですよ

本当は対象の体内時計を止める・・・と言う方が合っていると思います」

柊の説明が終わり慧音と妹紅はうなずいていた

慧音「そういえば俺達と言っていたが斉藤殿も何かあるのか？」

月冴「ん ああ あるぞ」

月冴は残っていた茶を飲み干して説明を始める

月冴「俺の持っている力みたいなものは 簡単に言えば身体能力強化だな

まあ 足が早くなったり 力が強くなったりとかだな 俺はそれだけだ」

柊「月冴のは俺と違って能力使って疲れるとかは無いんですよ 俺のよりも使い勝手がいいんだよなあ」

妹紅「外の人間が能力持ちって言うのは珍しいな」

柊「あつ そういえばきちんと自己紹介してませんでしたね

深神 柊です よろしくお願ひします」

月冴「斉藤月冴だ」

慧音「上白沢 慧音だ こちらこそよろしく」

妹紅「藤原妹紅ふじわらのもへいだよろしく それと妹紅でいい」

4人はそれぞれ自己紹介をしたのであった

第五話 能力（後書き）

補足みたいなものですが、月冴と幽香の戦いでは月冴は能力を使っています

1秒ほどで10m近く進むっておかしい気がしてきたな・・・

第6話 ニートは嫌だ（前書き）

毎回タイトル考えるの困るなあ

第6話 ニートは嫌だ

自己紹介が終わった後、それは慧音から言われた

慧音「ところで 二人は幻想郷にいる間 どこに住むんだ？」

柊「・・・・・・・・・・」

月冴「・・・・・・・・・・」

やばい・・・・・・・・・・忘れてた

そうだななんか月冴と俺で幻想郷に居ようとか言ってたけど
一番大事なことを忘れてたああああ

そんな事を思っていると慧音から声が掛かった

慧音「・・・・・・・・やっぱり考えてなかったか」

・・・・・・・・まったくと言うほど考えてなかったな

大佐は野宿とか言い出しそうだしな マジでどうしよう

慧音「それなら 家に来ないか？」

・・・やばいな 追い詰められて自分の都合のいいような幻聴が聞
こえてきたな

さてここは聞き逃した様を装って聞くべきだろう

柊「今　なんか言いました？」

慧音「ああ　私の家に来ないか？」

柊「月冴・・・お前は今なんて聴こえた？」

月冴「・・・家に来ないか？　と言う言葉が聞こえたよ」

どうやら俺の頭は大丈夫だったらしい

柊「でも・・・いいんですか？　仮にも男ですしそれに二人なんて大変でしょう」

慧音「はは　二人なら大丈夫だろ　それと

空いてる部屋があるから一つの部屋に二人になるがそれでもいいのだが」

柊「月冴はどうなんだ？」

月冴「俺らには行く場所もないだろ　これほどうれしい提案はないさ
ここはお言葉に甘えさせてもらおう」

柊「そうだな　それではお願いします慧音さん」

そう言い俺と月冴は深く頭を下げた

慧音「頭を上げてくれ　こちらこそよろしくな」

慧音さんには助けてもらってばかりだな　それにしても本当に助かったな

「……ん？ちよつと待てよ この図は……」

慧音さんに養ってもらう 俺自由にやる ニート？

柊「ニートは嫌だあああああ！！！！！！」

月冴「どうした柊！いきなり立ち上がって とりあえず落ち着け」

柊「落ち着いてられるかあっ！！俺らこのままだとニートだぞ！！
仕事探さないといけねええええ」

慧音「ま、まあ 仕事を探すなら人里で探すといいと思うぞ」

何の仕事をするべきか……いや幻想郷にはどのような仕事がある
かさえ解っていない
とりあえず職を探さなければ！！

慧音「仕事を探すのは明日にきなさい 仮にも怪我していたんだ」

柊「………そうします」

駄目だ疲れた 起きて数時間しかたってないけど今日はもう寝たい
……

やっぱり力を使うのは駄目かな？まあ怪我していたのもあるのかも
しれないが

柊「慧音さん済みませんがなんか疲れてしまったみたいで部屋で寝
てもいいでしょうか？」

「ついでに使っていい部屋を教えてください」

慧音「ああ 部屋はさっき寝ていた部屋を使ってくれ 昼食に起こ

しに行こうか？」

柊「いや 今日はもう寝て明日を迎えられます 今日は起きなかつたら起こさなくてもいいです

その時は夕食もいいですので・・・」

慧音「わかった ゆっくり寝なさい おやすみ」

柊「はい おやすみなさい」

この後柊は部屋に向かいすぐに寝た
そしてその日はもう起きることがなく明日を迎えた・・・

第6話 ニートは嫌だ（後書き）

一度はニートって楽しうだなあって思ったことはありませんけどね

第七話 就職（前書き）

今回は早くできた（自分にとっては）

最近メイプルストーリーをやり始めた

そのせいで遅くなったら済みません

第七話 就職

柊が翌日起きて朝食を取った後それは朝柊が慧音に聞いた

柊「慧音さんは仕事してるんですか？」

慧音「ん？ああ しているぞ」

まあ そうは思っていたけど

柊「何の仕事をしているんですか？」

慧音「人里で寺子屋を開いて子供たちに勉強で基本的な事を教えるよ」

柊「へえ 寺子屋を」

月冴「寺子屋？ああ俺達のところでいう学校か」

寺子屋か そうだ

柊「そうだ慧音さん幻想郷についての本とがありますか？」

慧音「んゝ 歴史の本とかならあるぞ」

柊「できればそれを貸してもらえませんか？ 幻想郷について知りたいんです」

慧音「そういう事ならいいぞ」

慧音さんは快く了解してくれた

慧音「もう少ししたら寺子屋に行かないといけないから帰ってきてからでいいか？」

柊「いいですよ 借りる側ですし慧音さんの都合のいいときで」

あ そうだ

柊「そうだ慧音さん 俺は今日仕事を探しに行こうと思っているので出かけてきますね」

月冴「仕事・・・探しに行くのか」

柊「そりゃあ 仕事しないと な それに今俺たちは金がない・・・金がないから必要なものも買えない だから仕事しないといけない

ってことだな あっ 別に月冴がしたくなくればしなくてもいいとは思うぞ」

月冴「なんかそう言われると嫌だな なんか・・・・・・ヒモみたいで」

そんなつもりで言ったわけではないんだがな

慧音「すまないがそろそろ行くな 昼食は・・・どちらか料理はできるか？」

柊「一応俺も月冴もできますよ」

慧音「なら 悪いが適当に作って食べてくれないか？」

柊「はい わかりました」

慧音「夕方くらいには帰るよ じゃあ 行ってきます」

柊「はい 行つてらっしゃい」

月冴「行つてらっしゃい」

そう言い慧音は家を出つて行つた

柊「そうだ 月冴はどうする？」

月冴「どうする って なにを？」

柊「いや 仕事を探しに行くか行かないかって話」

月冴「俺はいいかな・・・面倒だし」

面倒つて・・・おい

柊「はあ まあいいや 仕事見つけたら月冴も入れるか聞いてみるよ」

月冴「ありがとう それでこそ柊だ」

柊「はいはい 俺ももう少ししたら行くからな」

月冴「おう わかった」

とりあえず人里いかないと駄目なのか……

あつ 人里^{どこ}つて何処だ？ まあ 何とかなる……か？

柊は少しした後

柊「じゃあ 行ってくるわ 一通り聞いたら戻って来るわ」

月冴「おう 気を付けて行って来い」

柊「ああ 何に気を付けるのかは分からないが 行ってきます」

そう言い柊は家を出た

柊が家を出て数分歩いたら人里だと思われるが見えた

ここが人里かな？ 建物がたくさん建っているしたぶんそうだろうな
全部木造なのかな？ 見た感想は昔の日本って感じが

人里には店を開いている人も多く仕事を探すのにはちょうど良かったようだ

よしとりあえず訊きまわってみるか

・
・
・
・
・

・
・
・
・

・
・

慧音「ただいま　って　うわあつ　深神殿そんな部屋の隅でどうしたんだ!？」

月冴「はは　ちょっと・・・ね」

妹紅「ん?どうしたんだ?」

そこで妹紅が慧音の後ろから顔を出した

妹紅「うわあつ　部屋の隅が灰色だ　主に三角座りしている人」

慧音「本当にどうしたんだ?」

柊「はは　職が見つからないや・・・幻想郷も就職氷河期中ですか
仕事探せばどこかで働けるだろうなんて考えていた自分が甘すぎたのかな?

はは　職に就くのがこんなに大変だったとは・・・」

慧音「……仕事が見つからなかったのか」

柊「……………はい」

はは 人里の端から端まで探したけど見つからないとはな……

慧音「それは大変だったな まあ 気を落とさずにまた頑張ればいいじゃないか」

柊「そうですねまた今度ががんばることにします」

そろそろ立ち直らねばな

慧音「じゃあ 夕食を作るから待っていてくれ

後 妹紅も一緒に食べていくから」

柊「あつ はい わかりました」

あつ 作るの手伝ってこようかな……

そう思っただけに移動しようかと思っただけに月冴から声が掛かった

月冴「柊 これを見てくれ」

そう言われ月冴が差し出したものを見る
それは一つのバッグだった

柊「これがどうした？」

月冴「いや今日昼に俺たちの部屋で見つけてな…… これお前の

じゃないか？」

ん？俺の？ 確かに俺もこのバッグ持っていた気がするが・・・

柊「でも、ここは幻想郷だ なぜ俺のバッグがここに来れるんだ？」

そう これが俺のバッグだったとしても そこがわからなくなる

妹紅「聞いてて思ったんだけどさ 一応自由に外から幻想郷に物を
持ってこれる奴が一人いるんだよ」

隣で話を聞いていた妹紅が言った

月冴「そんな奴がいるのか？」

妹紅「でも なんでそんなことをするのかってとこだよな まあ
基本よくわからない奴だけだな」

柊「一応慧音さんにも聞いてみたら？」

妹紅「そうだな そうしよう」

その後柊は慧音の手伝いをし 全員で夕食を取ったのであった

第七話 就職（後書き）

次も早く投稿できるように頑張ろうと思います

第八話 バッグ

夕食を取った後

月冴「慧音さん これ俺らの部屋に置いてあったバッグなんですけど
慧音さんは心当たりとかありますか？」

そう言いながら月冴は慧音にバッグを渡す

慧音「うーん 心当たりはないな」

月冴「そうですか」

慧音「それと私の家にこんなバッグは無いぞ」

そうなるとこれは慧音さんのバッグではないことになるな

月冴「・・・・・・・・・・・・・・・・開けてみるか」

柊「マジで！？開けちゃっていいのかよ」

月冴「仕方がないだろ このまま誰のかわからないまま誰のかわからないまま
置いてくのも嫌じゃないか？」

まあ そうかもしれないが・・・

月冴「と言っわけで はい」

柊「はあ？」

月冴「はあ？ じゃないだろ お前が開ける 早く」

月冴は誰のかわからないバッグを差し出してくる

何と言っ理不尽

柊「まあ 仕方がない開けるか・・・」

柊はゆっくりとバッグを開ける

その中身は・・・

柊「服？と手紙か？」

バッグの中は服と手紙であった
とりあえず服を見てみた

柊「この服は・・・俺のか？」

サイズと柄が柊の持っている服と同じものだった

妹紅「その手紙は？」

この手紙か・・・

月冴「開いてみたら？」

開けていんだろうか．．．．．開けるけど

柊は手紙の中を簡単に確認した

柊「．．．．．どうも紫と言う人物が置いていったようだね 何故置いて行ったのかは書いてないな．．．」

てか俺の服．．家から持ってきたのか？鍵かけてるはずだし 家にいることがおかしくないか？

まあ 助かるからいいけどさ．．．．

慧音「よかったじゃないか」

全員がバッグの中身を出していく その中で柊は気になるものを見つけた

柊「なんだこの封筒？」

柊が見つけたのは茶色い封筒 少し厚いが．．

妹紅「それは？」

月冴「開ける」

強制なのね．．．．．もういいけど

柊「．．．．．これは 20人の諭吉が俺を見ている」

そこには20人の諭吉．．．．．もとい20万円があった

柊「『これもあなたの家から持ってきたわ 勝手に持ってきてごめんなさいね by 紫』

って隠し場所ばれてる!？」

妹紅「それにしても本当に紫のせいだったとはな・・・」

月冴「何故こんなことをするんだろうか・・・意味が解らないな」

慧音「彼女の考えていることなんてわからないよ」

慧音が笑いながら言う

そんな笑いながらいう事でしようか

柊「まあ とりあえずは助かったな 明日人里で必要なものでも買うか」

月冴「どこに何があるとかわからないぞ」

柊「今日回ったから大体わかるから大丈夫だよ」

本当に端から端まで歩き回ったからね・・・

柊「じゃあ慧音さん明日は人里に買い物に行きますね」

慧音「ああ わかった」

柊「ふあああ 今日歩き回ったから疲れたな・・・
そろそろ 風呂入って 早めに寝るかな」

月冴「俺もそうするかな・・・疲れたし」

妹紅「それじゃあ 私もこころ辺で帰るかな」

柊「あ、妹紅お休み」

妹紅「お休み じゃあな」

じゃあ風呂でも入るか・・・

部屋

月冴「柊 寝る前に少し話がある」

柊「何だ？・・・もしや！愛の告白とか！？・・・って
ちよっ まずその握りしめている拳おろすんだあ！！」

月冴「さて お望みどおり愛の鉄拳でも喰らわせてやろうか」

柊「すみませんでした 調子乗りました」

すぐに謝る俺

月冴「まあ いい それで話だが・・・」

柊「そうそう なんなんだ？」

月冴「あれだ こっちでは能力をどうするかってことだ」

柊「あゝ こっちでなら使ってもいいんじゃないか？

幻想郷もそういうのあるみたいだし」

月冴「そうか 話はそれだけだ」

柊「では俺から質問だ 今日何してたの？ 疲れた
とか言ってたから気になった」

月冴「今日は筋トレや体力作りしていた やっぱり体力落ちてるな」

月冴らしいな

柊「もう疲れた俺は寝る」

月冴「そうか お休み」

柊「お休み」

本当に疲れていたようですぐに寝つけた・・・

第九話 香霖堂

前日言っていたとおり柊と月冴は人里に来ていた

柊「月冴の服を買おうと思うが・・・どうなのがいい？」

月冴「どうなの・・・と言うと？」

柊「えっと、和服か洋服かどっちがいい？」

月冴「洋服もあるのか？見た感じなさそうな雰囲気だが・・・」

柊「最初俺もそう思ったが1件売っていると見つけたよ」

月冴「じゃあ洋服にしたいな いつも着ているものだしな」

柊「なら洋服買に行くぞ」

で、店に

柊「こんにちわ」

「ん、昨日のお兄ちゃん 昨日も言っていたとおり仕事はないよ？」

店のおっちゃんが言った

柊「いやいや 今日客だよ こいつの服を買いに来たんですよ」

そう言い月冴を指さす

「そうだったのかいそれは早とちりしてしまったね」

柊「いえいえ まあ今日は服買いますんで 適当に見ていってもいいですか」

「ああ いいよ」

青年物色中・・・・・・・・・・

柊「よし このくらいあればいいか」

月冴「・・・買いすぎじゃないのか？」

柊「いや このくらいあった方がいいって」

月冴「そうか？」

柊「そうだって じゃあ支払するぞ」

あつ 今更だけどこの金使えるのか？
俺らの世界だけってことはないよな・・・

柊「あの このお金って使えますか？」

お札を見せてみる

「んん 使えるよ」

おつ ちゃんと使えるみたいだ

柊「じゃあこれで」

お札を二枚だし支払いを済ませる

柊「じゃあ行くか月冴」

月冴「ああ」

「ああ ちよつと」

おっちゃんと呼び止めようとしたが二人は行ってしまった

「お釣りも持っていないで行っちゃったよ」

柊「さて後買うものとかあるか？」

月冴「いや もういんじゃないか？ 必要な物は大体買ったんじゃないか？」

柊「なら いいか」

あっそうだ

柊「俺行ってみたいところあるんだが・・・」

月冴「なら行こうじゃないか それはどこなんだ？」

柊「まあ ついて来れば分かるよ」

青年移動中・・・・・・・・

柊「多分ここだ」

月冴「・・・・・・・・多分？」

柊「ああ たぶん」

月冴「もしかして・・・来たことないな？」

柊「無いよ」

月冴「・・・そうか」

柊「いいじゃないか 入れば問題ないさ」

月冴「香霖堂・・・か」

柊「こんにちは」

????「こんにちは」

中にはいかにも優男という感じの青年がいた

????「やあ 見ない顔だね」

柊「ええ 最近幻想入りしたものでして」

????「ああ そういえば新聞に載っていたような・・・」

柊「載ってましたね」

霖之助「僕は森近霖之助君たちの名前を覚えてくれないかい？」
もりちかりのすけ

柊「俺は深神柊です」

月冴「斉藤月冴です」

お互いに簡単に挨拶をした

霖之助「今日はどうしたんだい？」

柊「外の物があるとか聞いたので来てみたんですよ」

霖之助「じゃあ ゆっくり見ていくといいよ」

笑顔でそう言ってくれた

柊「ありがとうございます」

お言葉に甘えて物色することにした
店の棚には色々な物があつた

月冴「セガサ〇ーン・・・懐かしい」

柊「セガ〇ターン？なにそれ？」

月冴「これだよ 昔見たことがある でも今知っている奴少ないかもな」

たしかに俺は知らないな

そんな感じで懐かしい物やら珍しい物を見ていたら
ふと目に留まるものがあつた

柊「これは・・・？」

月冴「どうした？・・・刀？」

柊「ああ・・・こんなもの置いていて大丈夫なのか？」

そう言うとき霖之助さんから声が掛かった

霖之助「幻想郷では刀を持っていても特に何も言われないよ」

月冴「そうなんですか？」

霖之助「うん でもその刀はお勧めしないな」

月冴「どうして？」

霖之助「その刀ある人から貰ったんだけどね・・・その刀は誰にも抜けないんだ

その人が言うには曰くつきらしくて何でも大昔その刀で何人もの人を

斬った人がいたらしくてその人も最後にはその刀で自害してしまっただとか・・・

斬られた人の怨念がついてるとか呪いだとか言っていたよ
それでその後その刀を所有した人はその刀に憑りつかれるとか憑かれないとか」

月冴「・・・なんかすごいな」

霖之助「いや でも噂だから本当かはわからないんだよ」

霖之助さんは笑いながら言った

霖之助さんが話している間妙な違和感のようなものを感じた

この刀をどこかで見たことがある気がする

ならどこで見た？本？ネット？おじさんの家とか？

必死に考えてみるものの何もわからない思考はすべて空回りするばかり

それでいてなぜかその刀に興味が湧いた

終「その刀抜けるか試してもいいですか？」

霖之助「別にかまわないよ」

月冴「本気か？」

柊「呪いだとか怨念とか面白そうじゃないか」

月冴「……俺も試そう」

柊「結局お前もじゃないか」

月冴「お前が試してみたいと言わなかったら
試す気は起きなかったがな」

霖之助「じゃあ どっちが先に試す？」

霖之助さんが柵から刀を下していた

月冴「俺からいいか？」

柊「いいぞ」

月冴は霖之助さんから刀を受け取ると
左手で鞘右手で柄を握る

その場に緊張が走った気がした

月冴「いくぞ」

そして月冴が抜こうとする……が

月冴「くっ 抜けない」

いくら月冴が鞘から抜こうとしても1ミリも抜けなかった

柊「月冴ふざけてる？」

月冴「お前にはこれがふざけてるように見えるのか？」

柊「いや・・・見えない」

霖之助「やっぱり駄目か・・・」

霖之助さんは笑いながら言ったが少し残念そうだった

月冴「ほら お前の番だ」

こちらは悔しそうだった

柊「ああ」

俺は月冴から受け取り月冴と同じように構える

柊「じゃあ いくぞ」

今度は俺が抜こうとする
すると・・・

霖之助「・・・まさか」

月冴「・・・」

抜けてしまった 刃がすべて見える

柊「まさか抜けるとはね」

まったく自分でも驚きだ

どうせ抜けないだろうと思っていた
それにしても・・・

柊「いい刀だな」

俺も少しは刀についてわかる方だ

柊「霖之助さんこの刀いくらですか？」

霖之助「えつと買うのかい？」

柊「ええ 欲しいので いくらかなと」

霖之助「それなら別にお代はいいから持って行っていいよ」

柊「えつ 本当ですか？」

霖之助「うん 元々それを抜けた人が欲しいと言ったらこうする気
だったから」

柊「じゃあ いただいていきます」

その時外から元気のいい声が聞こえた

???「こーりん 今日こそあの刀を抜くからなー！」

その声の主は一人の少女のものだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8063u/>

親友と共に幻想入り

2011年11月21日11時36分発行